箱 崎 16

-箱崎遺跡群第15次調査の報告-福岡市埋蔵文化財調査報告書第810集

2 0 0 4

福岡市教育委員会

玄界灘に面し、「活力あるアジアの拠点都市」を目指す福岡市には、豊かな自然と歴史が残されており、これを後世に伝えていくことは、現代に生きる私達の重要な務めであります。福岡市教育委員会では、近年の開発事業によって失われていく埋蔵文化財について、事前調査を実施し、記録保存に努めてまいりました。

本報告書に収録した箱崎遺跡群第15次調査は、個人の専用住宅建設に先だって実施した発掘調査で、限られた面積での調査ではありましたが、多くの貴重な成果をあげることができました。

本書が、文化財保護へのご理解と認識を高める一助となり、また研究資料としても活用していただければ幸いです。また、発掘調査から本書の刊行にいたるまで、多くの方々のご理解とご協力を賜りました。特に地権者の古田福雄氏には、発掘調査にご理解と種々のご協力をいただき、心からの謝意を表します。

平成16年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 生田 征生

例 言

- 1. 本章は、専用住宅建設に先立って福岡市教育委員会が発掘調査を実施した、箱崎遺跡群第15次 調査(福岡市東区箱崎1丁目2615の一部)の成果を報告するものである。
- 2. 本章の編集・執筆には、大庭康時があたった。
- 3. 本章に使用した遺構実測図は、大庭・佐藤信・大濱菜緒が作成し、大庭が浄書した。
- 4. 本章の遺構実測図中および文中に用いている方位は、すべて磁北である。
- 5. 本章に使用した遺物実測図は、大庭康時・井上涼子が作成し、大庭・井上が浄書した。
- 6. 遺構写真・遺物写真は、大庭康時が撮影した。
- 7. 遺物・記録類の整理には、井上涼子・坂田薫子があたった。
- 8. 本調査にかかわるすべての遺物・記録類は、福岡市埋蔵文化財センターにおいて、収蔵・管理・公開される予定である。

調	査	番	号	9816 遺跡略-		略号	H K Z 1 5		分者	万地 図番号	箱崎34
調	查 均	也地	番	福岡市東区箱崎一丁目2615の一部							
開	発	面	積	100.24	ł m²	調査対	対象面積	4 (0 m²	調査面積	36.3 m²
調	查	期	間	1998年5月27日~1998年6月5日							

第一章 はじめに

1.発掘調査にいたるまで

平成10年5月8日、福岡市東区箱崎1丁目2615の一部に関する埋蔵文化財事前審査申請書が、地権者である古田福雄氏より、福岡市教育委員会埋蔵文化財課に対し、提出された。開発目的は専用住宅建設であったが、同地が福岡市文化財分布地図によって周知された箱崎遺跡群に含まれることから、埋蔵文化財課では試掘調査が必要であると判断した。

試掘調査は、同5月12日に実施、現地表下95cm付近で地山である砂丘砂層に到達し、遺構を確認した。一方、専用住宅建設ではあったが、自然砂丘上の建築で、径1000mmに及ぶコンクリート基礎杭の打ち込みが設計されており、施工によって遺構が破壊される状況は十分予想された。

これらの点から、埋蔵文化財課では開発行為に先立つ発掘調査が不可避と判断、実働10日として 0.5ヶ月の調査期間を想定し、専用住宅建設のため発掘調査費用には国庫補助金を当てることで、開発者との協議に入った。

発掘調査には、近接する博多遺跡群で、第107次調査を終えた大庭康時が入ることとなり、5月27日より着手した。

2. 発掘調査の組織と構成

調査主体	福岡市教育委員	会 教育	教育長		(発掘調査当時)	
			<u>/</u>	生田征生	(現任、	整理・報告時)
調査総括	同	埋蔵文化財課 課	長	柳田純孝	(発掘調]査当時)
			Į.	山崎純男	(現任、	整理・報告時)
	司	第2係	長口	山口譲二	(発掘調]査当時)
			E	田中寿夫	(現任、	整理・報告時)
調査庶務	司	第1	係	何野敦美	(発掘調]査当時)
		文化財整備課管理	係	卸手洗清	(現任、	整理・報告時)
事前審査担当	司	事前審査係	長日	田中寿夫	(発掘調]査当時)
		主任文化財主	事	杉山富雄	(発掘調]査当時)
			J	屋山 洋	(発掘調]査当時)
調査・報告担	当 同	第2	係	大庭康時		
発掘調査補助	佐藤信(当時 福岡大学大	学院、理	現在 福岡	岡県大平	村教育委員会)、
	大濱菜緒					
発掘調査作業	石川君子	井口正愛 江	越初代	清水	明	関加代子
	曽根崎昭子	津野浩之 永	隈和代	長田嘉	喜造	仲野正徳
	能丸勢津子	野口ミヨ 早	川浩	宮崎久	タマ子	村崎祐子
	森垣隆視	山内 恵 吉	田清			

3. 遺跡の立地と歴史的環境

箱崎遺跡群は、博多湾の最奥部に南北にのびた砂丘上に営まれた遺跡である。粕屋平野を北西に流れる宇美川は、箱崎遺跡群の東で大きく北に転じ、砂丘北端で多々良川と合流して博多湾にそそぎ込む。このため、箱崎遺跡群の東側は、大きな後背湿地となっていた。文献史料にその名が見える「筥崎津」は、おそらくこの後背湿地を指すものと考えられる。

箱崎遺跡群では、これまで38次の発掘調査が実施されており、徐々にではあるが、時代的な様相が明らかになりつつある。

箱崎の砂丘上に人間の生活が見られるようになるのは、これまでの発掘調査では、古墳時代前期である。この時期の遺構は、砂丘の東縁で検出されている(第8次・20次・26次調査)。

古代前半の遺構は今のところ確認されておらず、遺構の空白期があるようである。

10世紀になると、第2次・22次・26次・30次調査地点で遺構が見られるようになる。史料的には、延喜21年(921)大宰府観世音寺の巫女に八幡神の託宣があり、延長元年(923)に筑前国穂波郡大分宮を遷座し、筥崎宮を創建したとされる。10世紀の遺構がみられる調査地点は、砂丘の南東部に集中しており、これは現在の筥崎宮の裏手から南側に当たる。時期的な符合に注目すれば、筥崎宮の創建を契機として、再び遺構が展開するようになったと言えよう。

11世紀後半には、遺構はさらに筥崎宮周辺に広がるようになる。11世紀初頭の時期の説話として、 今昔物語は、筥崎宮の神官で京大夫と呼ばれた秦貞重と博多の宋人との交易を描いている。秦氏は、 大宰府の府官でもあり、筥崎宮と大宰府、日宋貿易との関わりが推測できる。

仁平元年(1151)には、大宰府の軍兵が博多・箱崎で追補を行うという事件が起きた。博多の「王 昇後家」より始めて五百余家を追補し、筥崎宮に乱入したこの事件は、明代の地誌の「大唐街」とい

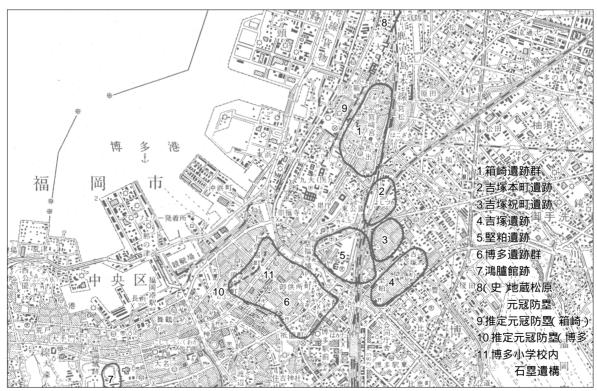


Fig. 1 周辺遺跡分布図 (1/50,000)

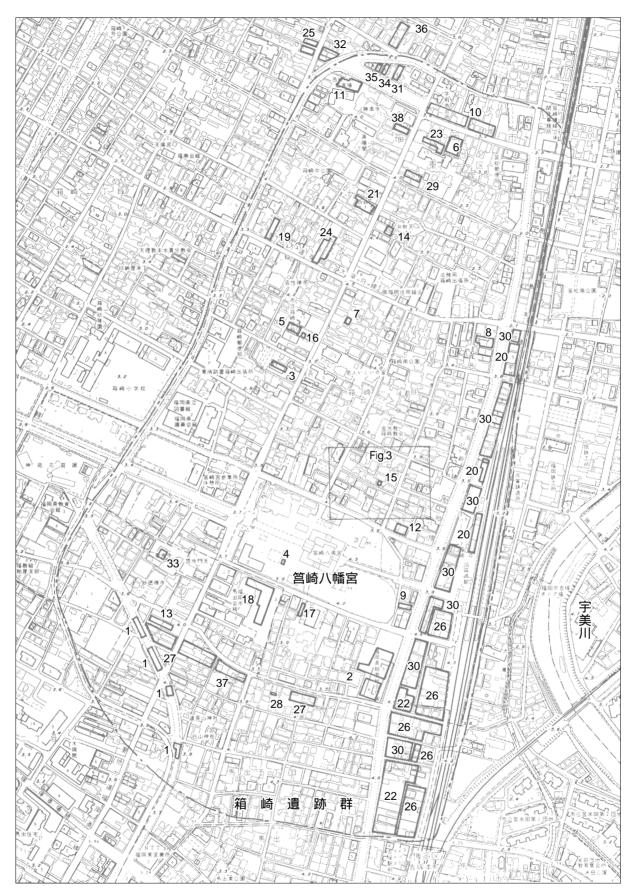


Fig. 2 箱崎遺跡群調査地点分布図(1/5,000)

う記述とあいまって、博多から箱崎にかけて宋人居住地があり都市化していたする際の根拠とされてきた。しかし、近年の研究では、大唐街は博多にあったと読めること、博多遺跡群と箱崎遺跡群の間には当該期の遺跡がまったく分布しない砂丘が挟まっており、一連の景観とは考えられないことが指摘されている。一方、箱崎遺跡群の発掘調査では、12世紀後半になると、遺構の分布範囲が遺跡群のほぼ全体に広がることが知られており、宋人居住地の問題は別にしても、12世紀後半に箱崎遺跡群が急激に膨張、充実したことは推定されるところである。

こうして拡大した箱崎遺跡群であるが、各調査地点の下限を見ると、13世紀から14世紀に衰退した地点が多く、中世後半まで遺構が継続する地点は、案外少ない。未だ、分布的に傾向を見いだせるだけの地点数は得られていないが、箱崎遺跡群の範囲内で、町場が数カ所に収斂していったものと考えられる。それぞれの町場の核を見いだし、これを構造的に論じるのは今後の課題である。

なお、文献史学の観点からは、佐伯弘次氏によって、「宗教都市であると同時に、筥崎宮関係者の 対外貿易に関わる貿易都市、筥崎宮油座がある商業都市、石築地が築かれ、異国警固番役を勤仕する 御家人が滞在した軍事都市など、中世の箱崎は様々な性格を有した都市であった」とされている。

さて、箱崎遺跡群の変遷を簡単に追ったが、本書で報告する第15次調査地点は、現在の筥崎八幡宮の北辺から北に約50m、南北にのびた砂丘尾根線上に位置するものである。

佐伯弘次1986「博多「大唐街」考」『七隈』23号 福岡大学歴史研究部

2001「軍事的拠点としての中世箱崎津」『博多研究会誌』第9号 博多研究会

大庭康時1995「大陸に開かれた都市 博多」網野善彦・石井進編『中世の風景を読む7 東アジアを囲む 中世世界』新人物往来社

榎本義嗣2003「福岡市所在の箱崎遺跡について」『中世都市研究会2003年九州大会 資料集』中世都市 研究会2003年九州大会実行委員会



Fig. 3 第15次調査地点位置図(1/1,000)

第二章 発掘調査の記録

1. 発掘調査の方法

発掘調査に際しては、砂丘砂層面までを重機で除去し、以下について人力で精査を行なった。表土掘削は、開発業者である緒方組の小型バックホーによって行ない、小型トラックで残土を搬出した。

表土掘削に関しては、発掘調査担当の大庭康時がそれまで調査にあたっていた博多遺跡群第107次 調査の終了日と重なったため、事前審査担当の屋山洋が立会い、大庭は途中で状況確認に立ち寄った。

遺構実測にあたっては、調査区が狭小のため、土地区画に合わせて任意に基準軸を設定し、2m方眼を設定して1/20で図化した。個別実測図は、必要に応じて1/10で、遺構主軸に合わせた任意の基準軸で実測した。土層は、周囲の四壁面すべて確認した上で、南東壁に代表させることとして、これを1/20で実測した。

全景写真撮影は、調査対象地の周囲にゆとりがなく、撮影用やぐらや高所作業車を入れることが不可能であったため、道路対面と対象地奥のアパートの南北二方向から撮影した。なお、写真撮影にあたっては、35mm版と6×7ブローニー版のモノクロネガとカラーポジフィルムを使用した。

調査は完掘をもって終了とした。終了後は、ただちに建築に着工することになっており、埋め戻し については、施工業者である緒方組が行った。

2. 基本層序

現地表下35cm、標高3.85mでバラス層にあたり、この上位が表土層である。Fig.4の1層から3層が、包含層にあたる。1層と2層の上面からは、遺構が掘り込まれているのが看取できるが、残念ながら調査は行なっておらず、時期等不明である。4層以下が、砂丘の自然堆積層である。4層には、粒度の違いによるトラ縞状の網紋が発達している。

4.5m

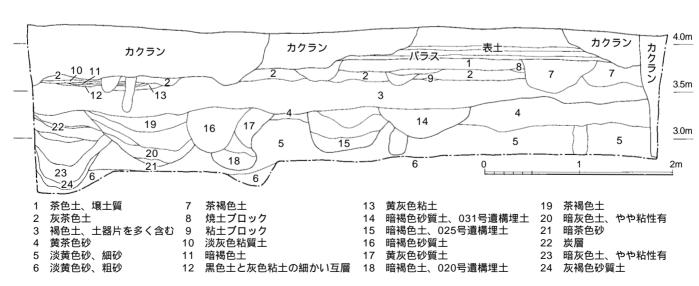


Fig. 4 調査区南東壁土層実測図 (1/40)

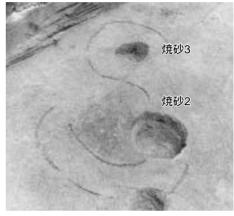
遺構の検出と精査は、雑じり気のない淡黄色砂である5層の上面で行なった。ただし、調査した遺構は、すべて4層の上面から掘り込まれたものである。

3. 発掘調査の経過

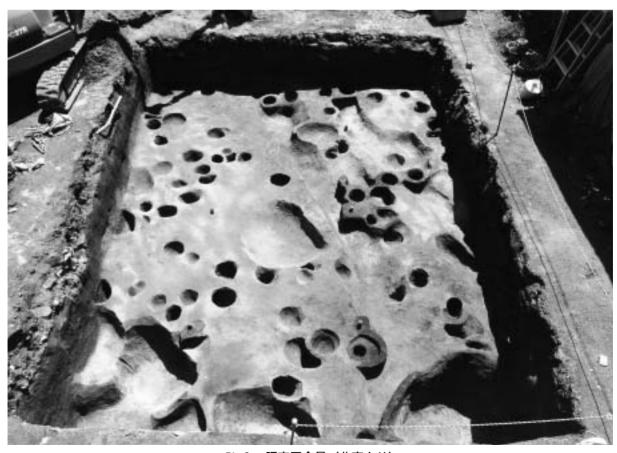
発掘調査には、1998年5月28日の緒方組による表土掘削をもって着手した。翌29日は、博多遺跡 群第107次調査現場から発掘調査機材を搬入、週明けの6月1日より遺構検出・精査に取りかかった。 遺構掘削はあらかたこの日の内に終了したが、翌日の雨により一部土砂が崩落、6月3日に改めて掘り上げ、清掃・写真撮影・遺構実測を終えた。

6月4日には土層実測を行なったが、壁際を30cmほど掘り込んだところ、古式土師器の高坏が出土した。また、砂の焼けた個所が見られたため、急遽調査区全体を30cmほど掘り下げたところ、4個所で、焼砂部分が検出できた。その内、焼砂2では、焼けて赤変した部分の中央に、炭粒を多く含む黒色砂が見られた。これらは、人為的な遺構と思われるが、掘削した形跡はなく、遺物も出土しなかった。周辺の測量を行ない、調査作業終了。5日には機材を撤収した。

なお、6月17日になって、建築工事現場より、基礎部分を 現地表下3mまで掘削したところから出土したとして、古式



Ph.1 焼砂検出状況(北西より)



Ph.2 調査区全景(北東より)

土師器の蛸壺が1点、埋蔵文化財課に届けられた。おおむね、標高1m付近からの出土となるが、焼砂検出を目的とした駄目押し掘削時の状況から、掘り残しの遺構があったとは考えがたく、砂丘形成~発達段階で混入したものと思われる。

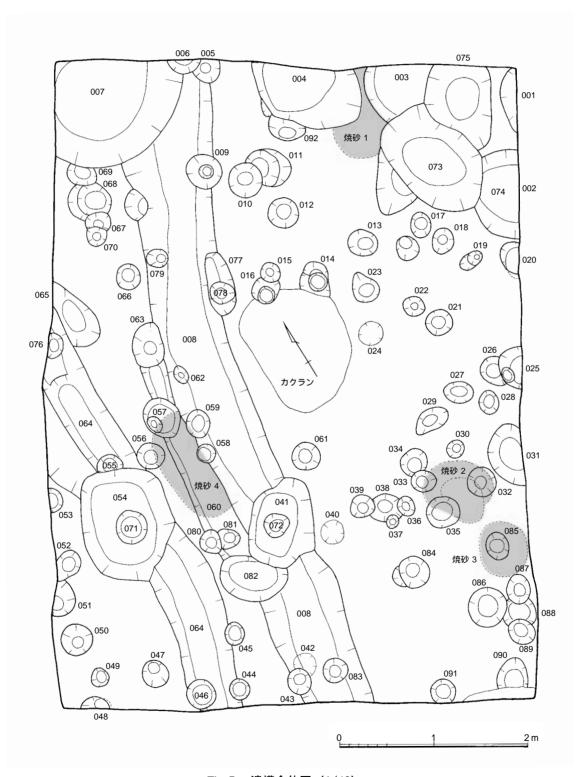


Fig. 5 遺構全体図(1/40)

4. 遺構と遺物

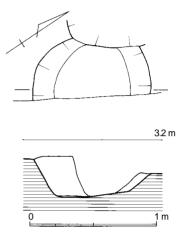
箱崎遺跡群第15次調査では、土坑・柱穴・溝状遺構などを検出、調査した。以下、遺構の種類ご とに報告する。

(1) 土坑

002号遺構

調査区の東隅付近で検出した土坑である。遺構検出時には大型の 土坑として設定したが、掘削が進んだ段階で、073号遺構と、074 号遺構とに分かれた。両遺構は、002号遺構の床面より検出してお り、先行する可能性があるが、少なくとも074号遺構については、 土層観察による限り (Fig.4) 002号遺構とは単一であり、皿型に大 きく広がった埋土上部を002号遺構、下部を074号遺構と認識した ものと思われる。Fig.6には、074号遺構を図示した。

出土遺物をFig.7に示す。1~9は、土師器である。1~3は皿で、底 部は箆切りする。体部は横撫で調整する。4~8は、坏である。4~6 は箆切りで、4の外底部には簾状の板目圧痕が見られる。また、Fig. 6 002号遺構実測図 (1/30)



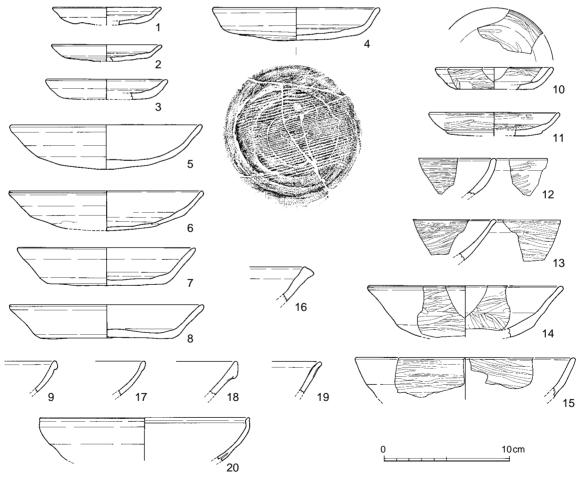
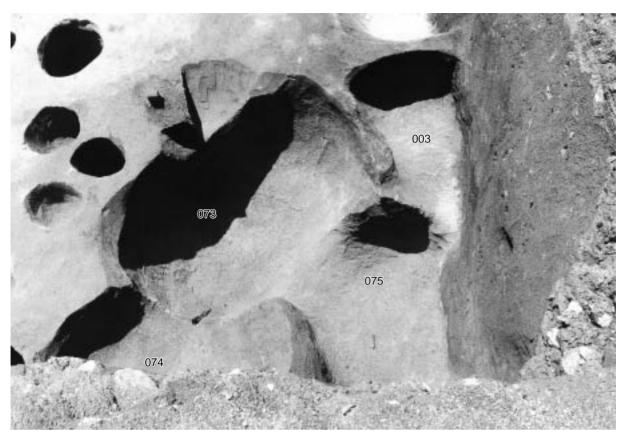


Fig. 7 002号遺構出土遺物実測図 (1/3)



Ph.3 調査区東隅付近土坑群(南東より)

4は平底気味に作るが、5・6は丸底にする。5・6の内面は、平滑に箆磨きされている。7・8は糸切りで平底となる。体部は、横撫で調整する。9は、椀であろう。口縁端部を外側に三角形に肥厚させ、玉縁につくる。体部は内弯し、明らかに白磁碗Ⅱ類を模したものと知れる。白色系の胎土である。10~15は、瓦器である。10・11は皿で、底部は糸切りした上から箆磨きする。12~15は椀である。12は、楠葉型瓦器である。炭素の吸着が悪く、白色系の色調を呈する。13~15は筑前型で、14には底部押し出し痕が明瞭である。16は、須恵器の鉢である。内外面は、横撫で調整する。東播系須恵器であろうか。17~20は、白磁碗である。17は、小さな玉縁を持つⅡ類碗で、上述した9のモデルとなったタイプである。20も17と同様に広東系のⅡ類碗である。

なお、11の瓦器皿のみ074号遺構から出土した遺物である。 これらの出土遺物から、12世紀前半の土坑であると考えられる。

003号遺構

調査区東隅付近で検出した土坑である。075号遺構に切られ、一部分が遺存していたに過ぎない。

出土遺物で図化に耐えたものを、Fig.9に示す。1~3は、土師器である。1は皿で、底部は回転糸切りする。体部は横撫で調整である。2・3は、坏である。2は、底部を糸切りするが、内面はこて当て状に平滑に整え、丸底気味となる。3は、箆切りの丸底坏である。内面はこて当て状に平滑となる。

12世紀前半の土坑であろう。

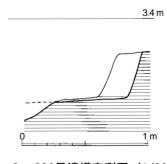


Fig. 8 003号遺構実測図 (1/30)

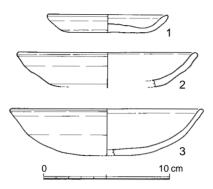
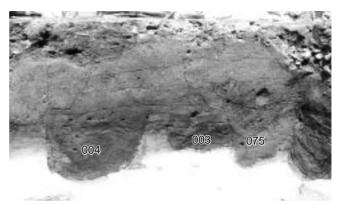


Fig. 9 003号遺構出土遺物実測図(1/3)



Ph.4 003号・004号遺構土層断面(南西より)

004号遺構

調査区北東辺から検出した土坑である。3分の1ほどが調査区外に出るが、おおむね全形を知ることができ、長軸130cm、短軸100cmほどの卵型に推定できる。遺構検出面からの深さは、53cm前後である。

出土遺物をFig.11に図示する。1~7は、土師器である。1~4は皿で、1~3は底部箆切り、4は回転糸切りする。器高が高い1・2のタイプと、低いものとがある。体部はいずれも横撫で調整で、内底部に静止撫でを加える。5・6は、坏である。5は器高がやや高いが、高台が剥離した痕跡はなく、箆切りの丸底坏と思われる。外底部には、押し出しによる亀裂が多数認められる。内外面とも箆磨きする。6は平底の大振りな坏で、底部は回転糸切りする。体部は横撫で調整で、大きく直線的に開く。全体に煤けている。7は、高台付きの坏であろう。平底の坏に、筒型の高台を貼り付けたもので、坏部は箆切りと思われる。8・9は、瓦器椀である。筑前型で、内外面ともに単位がはっきりしない幅広い箆磨きを施す。9は、押し出し技法で丸底にした後、箆磨きし、高台を付けたものである。体部は、内外面ともに分割箆磨きと思われる。見込みは、平行もしくはジグザグ状の箆磨きである。10・11は、白磁である。10は平底の皿で、釉の表面は細かい気泡ができて荒れ、光沢を失っており、二次的に火熱を受けた可能性がある。11は、口縁を玉縁に作るIV類碗の底部である。外底部は露胎となる。体部

3.4 m

Fig. 10 004号遺構実測図 (1/30)

は、外側から細かく打ち欠いて、円盤状に整えている。12は、 平瓦である。上面は布目、下面には複線の斜め格子の叩き目 が見られる。

12世紀前半の土坑であろう。



Ph.5 004号遺構(南西より)

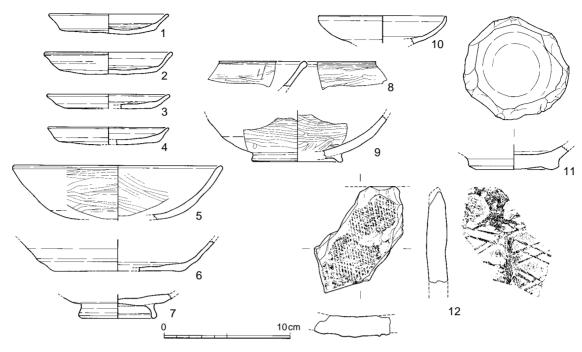


Fig. 11 004号遺構出土遺物実測図 (1/3)

007号遺構

調査区北端で検出した土坑である。調査区外に出るため、全形を知り得ないが、径150~200cmほ どの円形もしくは楕円形を呈するものと思われる。遺構検出面からの深さは、95cm前後を測る。

埋土下半から、多量の土師器を主とした遺物が出土した。調査区の壁際での調査であり、埋土下半 からの出土で精査が困難だったため、遺物の出土状況は 壁面に表れた土坑断面で示すことにして、一気に床面ま で掘り下げた。遺物の出土状況は、Ph.7に示すように、埋 土下半に逆レンズ状に包含されており、埋納状態を示す ものではない。また、埋土上半からは、ほとんど遺物の 出土はなく、土坑が埋まる初期の過程で、一時的に一括 廃棄されたものとみて大過ないだろう。

出土遺物をFig.13~15に示す。なお、土師器の坏・皿に ついては、完形品やそれに準じるもののみ実測しており、 接合できない破片が大量に残っている。器形のバラエテ ィーや法量の大小は、極力拾い上げたので、一応の傾向 は窺えるが、総量を示すものではない。

Fig.13・14には、土師器を図示した。1~51は、皿であ る。1~13は、底部を箆切りする。体部が浅く急に立ち上 がる1~6、なだらかに開き器壁が厚い7・8、立ち上がり が深い9、薄手で丸底気味に作る10~13、の4タイプが認 められる。いずれも体部は横撫でで、内底に静止撫で調 整を加える。14~51は、底部を回転糸切りする。14~34 が通常みられる浅い皿型のタイプであるが、40~43の様

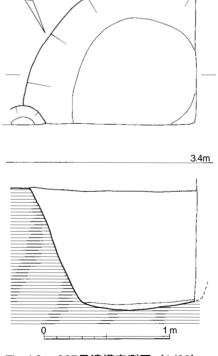


Fig. 12 007号遺構実測図 (1/30)





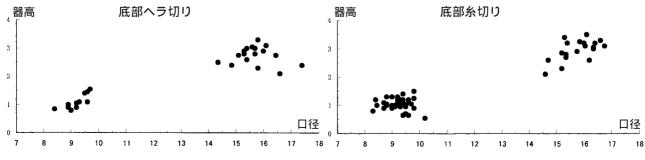


Ph.7 007号遺構土層断面(東西より)

に薄手で、極端に浅く偏平なものもある。そのほか、やや深めな35~37、べったりと平らな底部から短く厚手な体部が立ち上がる38・39、やや小振りで深い44~47などがある。48は、やや丸底気味とし、内外ともに箆磨きを加えている。49は、口縁の一部を内側に折り曲げるもので、耳皿風に作ったものかも知れない。50・51は、体部に、フリル状にしわを寄せており、意図的なものと思われる。類例は思い当たらない。

52~90は、坏である。52~68は、底部を箆切りする。65・66のように、一見丸底を意識したように見えるものもあるが、おおむね平底として大過ないようで、内面にこて当てや研磨を行うものはなく、体部は横撫で、内底は静止撫で調整する。器形のバラエティーも乏しいが、64の様に体部の丸みが強く器高が低いもの、体部が直線的になだらかに開いて浅い67・68などもみられる。69~90は、底部を回転糸切りする。69は、口縁端部を丸く外方に折り返している。玉縁を意識した可能性はあるが、遺存部位からでは確認できない。70は、極めて薄手に作る。焼成・胎土ともに良好で、白色系を呈する。71・72は、体部の立ち上がりが急で、浅いタイプである。73~76は、厚く平坦な底部に薄手で直線的に開く体部が付くもので、口縁部は丸く肥厚気味となる。77~88は、通有の器形と言える。89は、白色系の土師器で、精良な胎土で焼成も良好である。90は、微砂質の赤味の強い胎土で堅く焼成されている。体部は大きく開くようで、内面はこて当て状の平滑な器面調整の上に内底部の静止撫で調整が加えられており、他の坏とは大きく異なる。生産地を異にする可能性が高い。

91~97は、瓦器である。91~95は、筑前型の皿で、底部は箆切りする。91・94の外底部は、切り離し後撫でている様だが、92・95ではさらに箆磨きを加えている。体部と内面はいずれも箆磨きされるが、94の体部外面の磨きは省略されている。96・97は、楠葉型瓦器椀である。口縁部直下には、浅い沈線を廻らせる。97の器面は磨耗しており、箆磨きの単位がはっきりしない。98は、中世須恵器の鉢である。横撫で調整で、口縁部のみ炭素が吸着して暗灰色を呈する。



グラフ1 007号遺構出土土師器法量分布

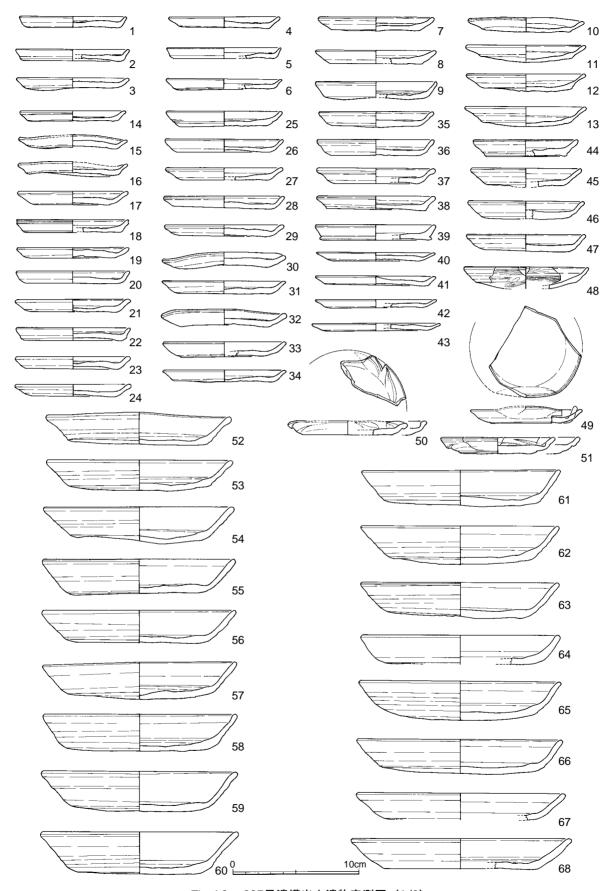


Fig. 13 007号遺構出土遺物実測図(1/3)

99~107は白磁である。99は壺で、口縁部を折り返して帯状に作る。100は、青白磁の合子である。遺存部位では、内面は施釉、外面は露胎となる。外面には、花弁状の連続した起伏が認められる。101~104は、皿である。101~103は平底に作る。101・102は漬け懸けで施釉し、体部下位から外底部が露胎となる。101の底部には、墨書が認められる。遺存が薄くはっきりしないが、「綱」の可能性がある。103は、全面に施釉した後、外底部の釉を掻き取っている。見込みは、円盤状に削り込む。104は、高台付皿の底部と思われる。口縁を玉縁に作るタイプであろう。105~107は、碗である。106は、破損した後、被熱している。107は、口縁の一部を欠いたほぼ完形の状態で出土した。

108は、平瓦の小片である。上面は布目、下面には矢羽型の叩き目が見られる。109は、小型の石鍋である。縦耳の一部が確認できる。滑石製である。

これらの出土遺物から、12世紀前半の土坑と考えられる。

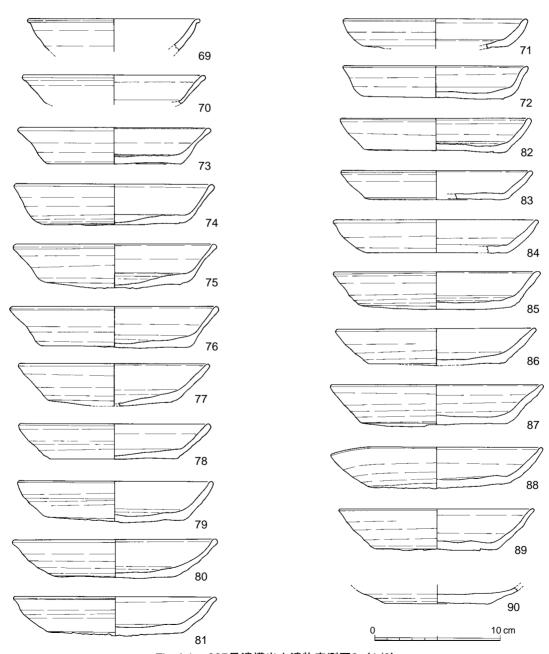


Fig. 14 007号遺構出土遺物実測図2 (1/3)

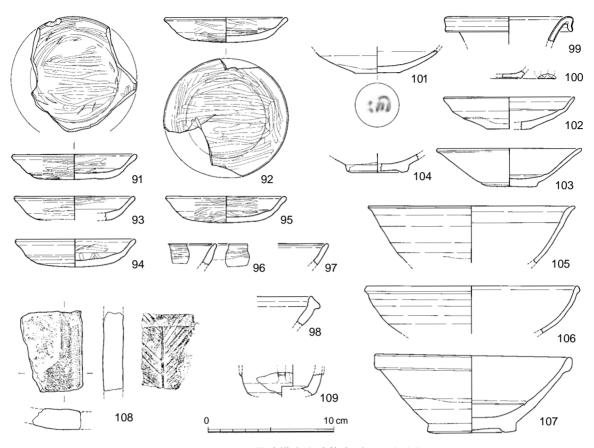


Fig. 15 007号遺構出土遺物実測図3 (1/3)



Ph. 8 007号遺構出土遺物

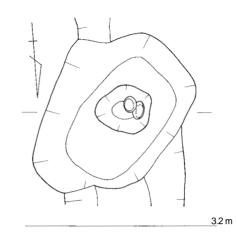
072号遺構

調査区中央やや南よりから検出した小土坑である。近代の木組みを持つ、041号遺構(一銭銅貨出土)の床面から検出した。041号遺構は、後述する008号遺構(溝状遺構)を切りこんでいるが、072号遺構と008号遺構とは、直接の切り合い関係を持たない。出土遺物から見た年代観では、072号遺構が後出することは明らかである。

長軸30cm、短軸26cmの卵形を呈し、041号遺構床面からの深さは、12cmをはかる。土坑西壁に沿って、上向きの瓦器皿と、下向きの土師器皿が、若干上下にずれた位置関係で出土した。土師器皿が、瓦器皿の蓋に使われた可能性がある。

Fig.17に出土遺物を図示する。1は、土師器の皿である。底部は回転糸切りで、体部は横撫で調整、内底部は静止ナデを加える。2は、瓦器の皿である。底部は回転糸切りだが、若干押し出し気味で丸味を持つ。体部は横撫で調整で、内面はこて当てを加えて平滑に仕上げる。

12世紀中頃から後半の土坑と考えられる。



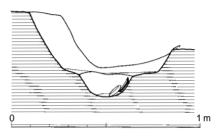


Fig. 16 072号遺構実測図 (1/20)

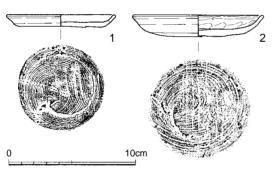


Fig. 17 072号遺構出土遺物実測図 (1/3)



Ph.9 072号遺構(南東より)





Ph. 10 072号遺構出土遺物

075号遺構

調査区東隅から検出した土坑である。003号遺構を切り込んで掘られている。なお、002号遺構の床面で検出した073号遺構には切られている。長軸110cm、短軸70cmの小判型を呈したものと推定され、調査した深さは約30cmほどである。

出土遺物をFig.19に示す。1~5は、土師器である。1・2は皿で底部を箆切りする。横撫で調整。3・4は、坏である。3は回転糸切り、4は箆切りであるが、ともに丸底にし、内面をこて当てで平滑に整える。5は、椀である。内外面とも、密に分割箆磨きする。6・7は、瓦器の椀である。6は楠葉型瓦器で、内面は密に横方向の箆磨き、外面はやや粗であるが、分割箆磨きする。II-1期に当たる。7は筑前型で、内面は平滑に調整される。幅の広い箆磨きと思われるが、単位ははっきりしない。8~10は、白磁の碗である。

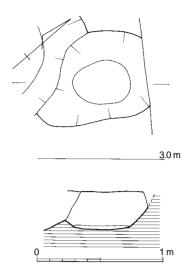


Fig. 18 075号遺構実測図 (1/30)

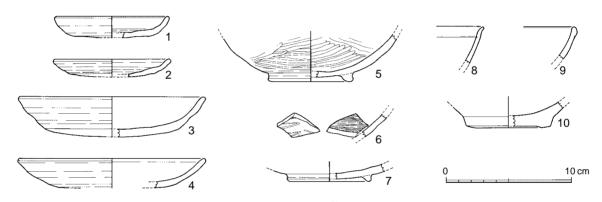


Fig. 19 075号遺構出土遺物実測図(1/3)

これらの出土遺物から、12世紀前半に位置づけられよう。

(2) 柱穴

柱穴状ピットは、多数検出されているが、建物跡としてまとめられるものは抽出できなかった。また、調査中の6月2日の降水で流れてしまった柱穴もあり(遺構検出の基盤が砂丘砂であるため、雨や乾燥による崩壊は避けられない)、それについてはFig.5中に白抜きで示している。

以下、出土遺物をFig.20に図示した順に報告する。

1~3は、086号遺構出土遺物である。1は土師器の皿で、底部を箆切りする。2・3は、白磁碗である。086号遺構からは、小片を含めても糸切りの土師器は見られず、11世紀後半頃に置くことができよう。4~6は、091号遺構出土遺物である。4は、土師器の皿である。底部は糸切りであろう。5は、楠葉型瓦器碗である。密に箆磨きされる。6は、白磁碗である。図化できなかったが、箆切りの土師器片も出土しており、12世紀前半に位置づけるのが妥当であろう。

7は、土師器の高台付き皿である(046号遺構出土)。極めて浅い皿に、筒状の高台を貼り付ける。 皿部分の底部は、箆切りされる。

8は、青磁の小碗である(050号遺構出土)。連江窯の製品であろう。内面には、櫛描きの花文があしらわれる。淡灰色で肌理の粗い胎土だが、外面下半の露胎部分は淡い褐色を呈する。釉は灰緑色の透明釉で、ガラス光沢が強い。

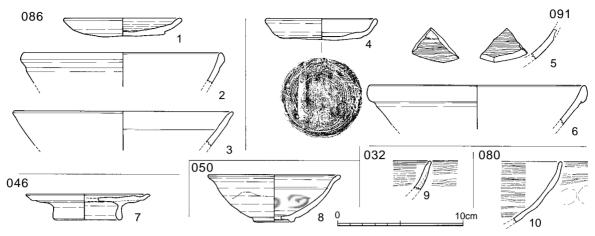


Fig. 20 柱穴遺構出土遺物実測図 (1/3)

9は、瓦器椀である(032号遺構出土)。楠 葉型 I 期に属す。口縁直下の沈線がめぐり、 内外面とも密に横位の箆磨きを加える。いぶ しが不完全で、灰白色を呈する。

10は、瓦器椀である(080号遺構出土)。

楠葉型Ⅱ-2期であろう。口縁下の沈線はみられず、器壁も薄い。内面の箆磨きは密であるが、帯状に生地の部分が残る。外面は、口縁部付近に粗い箆磨きがみられるが、その下位には見られない。ただし、この部分では器表の球状小剥離が激しく、疎らに施された可能性はある。

(3) 溝状遺構

おおむね南北方向を取る3条の溝状遺構を 検出した。

008号遺構については、後述する。

060号遺構は、008号遺構に接する溝で、これに先行する。11世紀後半に比定できる。

064号遺構は、深さ15~20cm、幅60cmほどの浅い溝である。11世紀後半に属する。

008号遺構

調査区の中央を、緩く蛇行しながらほぼ南北に貫く溝である。幅80cm前後、深さ30cm前後を測る。

出土遺物の内、図化できたものをFig.22に 示す。1~10・12は、土師器である。1~5は皿

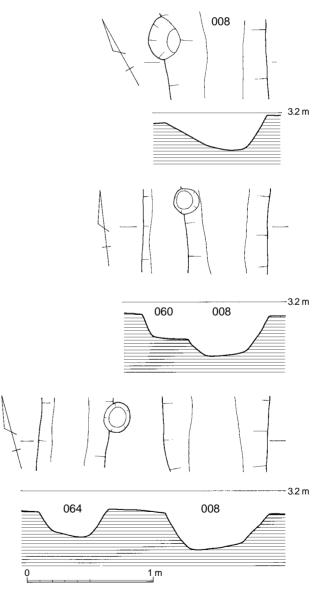
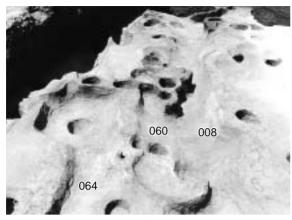


Fig. 21 008号遺構断面実測図 (1/30)



Ph.11 溝状遺構検出状況(南西より)



Ph.12 008号遺構楠葉型瓦器椀出土状況(西より)

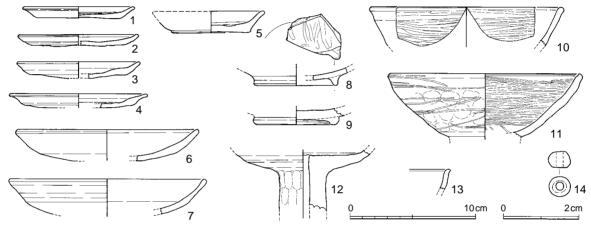


Fig. 22 008号遺構出土遺物実測図 (1/3、14…1/1)



Ph. 13 008号遺構出土楠葉型瓦器椀

で、底部を箆切りする。浅い皿型で体部が外反する1・4、内弯気味に短く立ち上がる2・3、小振りで深い5が見られる。6・7は、坏である。箆切りで、丸底に作る。体部外面は横撫で、内面はこて当てで平滑に整える。8・9は、椀の底部である。ともに、内面は単位が不明瞭な幅広い箆磨きで、平滑に仕上げている。10は椀の口縁部で、内外面とも密に箆磨きする。12は、器台である。上皿部の内面は横撫で調整、外面は撫で調整で、脚部は指押さえする。中心には、木軸を通した孔が貫通している。11は、瓦器椀である。内面は密に横方向の箆磨き、外面は粗く分割箆磨きする。楠葉型 II-1 期に当たるものと思われる。13は、白磁碗の小片である。14は、ガラス小玉である。深緑色、透明で、細かい気泡が多くみられる。

図示に耐えなかったが、底部を糸切りする土師器が少量出土しており、12世紀前半の早い時期に位置づけることができよう。

(4) その他の遺物

遺構以外から出土した遺物の内、重要なものをFig.23に図示する。

1は、筑前型瓦器椀である。南東壁の16層から出土した(Fig.4)。底部押し出し後、内面をこて当てして平滑に整え、さらに箆磨きを加える。外面は、横撫での上に箍状に箆磨きする。2・3は、楠葉型瓦器椀である。口縁直下に沈線が横走する。2の内面は密に横箆磨きするが、口縁下ではやや隙間が見られる。外面は、分割箆磨きの上に、横方向の箆磨きを加える。遺構検出時に出土した。3の内

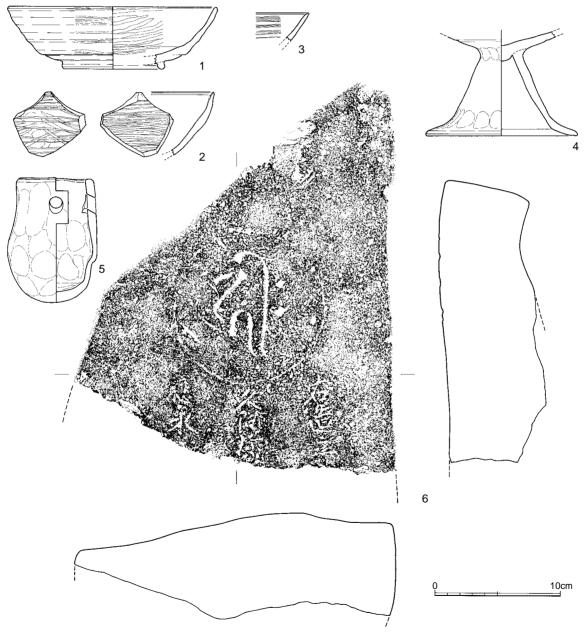


Fig. 23 その他の出土遺物実測図 (1/3)

面は、間隔を空けて数条単位の箆磨きが横走する。外面には、一条の箆磨きの暗文が確認できるだけである。南東壁清掃時に出土。

4は、土師器の高坏である。地山砂層中の、標高2.8mから出土した。皿部分の内外面は撫で調整で、沈線が一条めぐる。脚部も撫で調整だが、皿との接合部と、裾に屈折する部分には、指押えが横に並ぶ。5は、土師器の蛸壺である。内外面ともに、指押えで整形する。穿孔が一個所見られる。調査終了後、基礎部分の掘削をおこなっていた建築業者が採集したもので、標高1m付近からの出土となる。砂丘形成過程で交じり込んだ遺物であろう。

6は、板碑である。頂部付近の残欠で、斜めに切り落とされたような頭部の形状は、原形を留めている。中央に丸く囲んだキリークを置き、その下に三行の銘文を刻む。右から「右造立」、「久阿弥」、「應永」でそれぞれ以下は切れている。応永は、1394年7月から1428年4月まで続いた年号で、おおむね15世紀第1四半期の板碑といえよう。第15次調査地点から一筋北を通る東西路地の道端に、割れたコンクリートブロックと一緒に放置されていたもので、本来の位置は不明である。箱崎地区は、福岡市内でも最も板碑が集中する地域であり、近隣にあったものが家屋の解体に混じって廃材とともに持って来られたものとみて、大過なかろう。

第三章 小結

以上述べてきた箱崎遺跡群第15次調査の成果について、簡単なまとめを試みたい。

今回の発掘調査で検出した遺構は、土坑・柱穴・溝である。出土遺物から推定した時期は、11世紀後半から12世紀中頃である。

土坑は、いずれも廃棄土坑と考えられる。調査区の東隅から北東に集中する様である。なお、072 号遺構は小ピットの底に土師器と瓦器の皿を、合わせ口にして埋置したものと思われる。地鎮等の祭 祀もしくは習俗的な埋納であろう。

出土遺物は、土師器・輸入陶磁器などで、パン箱8箱ほどが出土した。楠葉型瓦器椀の出土が目だった他、小片で図示できなかったが、和泉型瓦器椀の体部が1点出土している。また、基盤砂層中から古式土師器高坏・蛸壺が出土しているが、砂丘形成過程で流れ込んだものと考えられる。

最後に、調査で十分確認できなかった課題を指摘したい。

今回の発掘調査は、基盤である砂丘砂層上面で遺構検出・精査を行なったものであるが、Fig.4で見るように、明らかに上層にもう1~2面の生活面が存在する。実は、表土掘削中の採集遺物の中に、12世紀後半代の竜泉窯系青磁片が見られた。報告した遺構で明らかにこの時期に下る遺構はなかったのだが、時期的な近さから見て、遺物が乏しく時期比定できなかった遺構の中に12世紀後半代に降るものがある可能性は十分に考えられる。一方、Fig.4の3層は、遺物を包含するが、この上面から掘り込まれた遺構は見当たらない。これを盛土整地と見るか、あるいは遺構の断絶と見るか、本来分層発掘が必要であったと悔やまれる点である。今後の周辺の調査に期待したい。

また、地山砂層中の標高2.8~2.9m付近で、焼砂部分を4ヶ所確認したことも注目したい。断ち割ると深さ10cmほどの皿状に赤変しており、内1基では中央に炭混じりと思われる黒砂がたまっていた。遺物はまったく出土していないが、明らかに人為的な遺構と考えられる。今後の発掘調査においては、砂丘砂層に対しても駄目押しの確認調査を加える姿勢が要求されることは間違いない。

書名	箱崎16					
副 書 名	箱崎遺跡群第15次調査の報告					
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書					
シリーズ番号	第810集					
編著者名	大庭康時					
編集機関	福岡市教育委員会					
所 在 地	福岡市中央区天神					
発行年月日	2004年3月31日					
所収遺跡名	はこざきいせきぐん 箱崎遺跡群	所 在 地	ふくおかけんふくおかしひがしくはこざき 福岡県福岡市東区箱崎1丁目2615			
市町村コード	40131					
北緯	33° 36′ 40″	東 経	1 3 0° 2 5′ 3 5″			
調査期間	19980527~19980605					
調査面積	36.3 m²	調査原因	専用住宅建設			
所収遺跡名	箱崎遺跡群	種別	集落			
主な時代	平安時代	主 な 遺 構	土坑·柱穴·溝			
主 な 遺 物	土師器・瓦器・輸入陶磁器					
特記事項	古代末から中世にか	- 5「箱崎津」に関連する遺跡である				

箱 崎 16

- 箱崎遺跡群第15次調査の報告 -

2004年(平成16年)3月31日

発 行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷川本印刷(株)

福岡市博多区博多駅南5丁目6-18